

## 学位請求論文審査報告書

氏名 岩田 香英  
論文題目 「親鸞の還相回向観」  
審査委員 主査 大谷大学教授 一楽 真  
                  博士（文学）[大谷大学]  
          副査 大谷大学教授 三木 彰円  
          副査 大谷大学名誉教授 藤嶽 明信  
          副査 大谷大学名誉教授 織田 顕祐  
                  博士（文学）[大谷大学]

### I. 論文内容の要旨

親鸞が明らかにする二種回向のうち、特に還相回向について『教行信証』「証卷」を中心に考察する論文である。還相回向については、これまでも多くの先行研究がある。しかし論者は、これまでの見解は一様ではなく還相回向については明らかになっていないという問題意識に立って、改めて親鸞の還相回向観を確かめようとしている。その際に、「証卷」全体のおよそ3分の2の分量に及ぶ『浄土論註』の引用を、親鸞の訓点に注意しながら正確に読み解くことに留意している。それをふまえて、法蔵菩薩を主体とする「還相」というはたらきと、信心を獲た衆生に実現する「還相」とが重層的であるという視点に立ち、両者を整理しながら考察を進めている。そして、還相回向という一語に、如来のはたらきの相と衆生の上に現れる相という二つの面があると見定め、その一つの見定めをもって「証卷」全体を読み通そうとした論文である。誠実な姿勢が全体に貫かれており、極めて意欲的な力作であると言える。

全体の構成は以下の通りである。

序

第一章 如来二種の回向

緒言

第一節 回向観の変遷

第一項 天親の回向観

第二項 曇鸞の回向観

第二節 親鸞の回向観

第一項 如来回向の開頭

第二項 回向の二種相と二種の回向

小結

第二章 還相回向開頭の意義

緒言

第一節 顕真實証

第一項 標挙の文

第二項 発端の言

第三項 必至滅度の二側面

第二節 必至滅度の願

第三節 浄土の莊嚴

第四節 往相回向の証果

小結

第三章 還相回向の内実

緒言

第一節 往相回向と還相回向

第二節 利他教化地の益

第三節 顕註論

第四節 未証浄心の菩薩

第五節 第二十二願文

小結

第四章 還相の利益

緒言

第一節 菩薩莊嚴功德成就

第一項 還相回向積における敬語表現

第二項 如来の自利利他の功德莊嚴成就

第三項 菩薩莊嚴功德の成就

第二節 浄入願心

第三節 善巧摂化

第一項 巧方便回向の成就

第二項 還相に現れる「教化」と常行大悲の益

第四節 巧方便回向成就を知る

第一項 菩薩に実現する法門

第二項 名義撰対

第三項 敬語表現に顕示される「法蔵菩薩」の巧方便回向

第五節 利行満足

小結

結

全体は四章立てで、第一章は「如来二種の回向」と題して、親鸞にいたるまでの回向觀の

変遷を見るため、天親『浄土論』および曇鸞『浄土論註』を確認し、その上で親鸞の回向観を概観している。第二章は「還相回向開頭の意義」と題して、親鸞の還相回向観を尋ねるに先立って、「証卷」において二回向がともに問題にされていることから、往相の証果について確認している。第三章は「還相回向の内実」と題して、本論の主題である親鸞の還相回向観について、「証卷」の文脈に沿って、特に不虛作住持功德の文を中心に尋ねている。第四章は「還相の利益」と題して、以上の考察をふまえて、親鸞の「還相」をどのように考えるべきかを述べている。特に親鸞の訓点に注意して、如来（法蔵菩薩）の還相というはたらきと、獲信の念仏者の上に顕れる相としての還相を「重層的関係」として見ている。

以下、簡単にそれぞれの内容について概観しておく。

第一章では、天親における回向は浄土を願生する行者が主体であることを先ず押さえている。それを承けた曇鸞は菩薩道の実践道としながらも、凡夫の仏道を掲げていく。その際に回向について往相と還相の二種相を見出している。論者はこれに注目して曇鸞の課題を尋ねている。そして親鸞になると、回向の主体は行者ではなく、如来の回向として明らかにされてくる。論者は親鸞の敬語表現に注意をしながら、天親・曇鸞の回向観を継承しながらも展開させた親鸞の回向観について考察している。

第二章では、親鸞における二種回向が衆生の上にかに成就しているのかという視点に基づいて、「証卷」の考察を進めている。特に、二種回向が同時にはたらくという視点をもって、還相回向が開頭される意義について、論者はまず往相回向を語る文言に依りながら、その萌芽を「従如来生」の文に見ている。その上で、衆生の自利の課題として「真実の教行信証」が実現することを押さえて、それに対して、利他の課題としての教化が実現することを明らかにするのが還相回向積であると論述している。

第三章では、「利他教化地の益」の語について、正確な読み取りを試みている。特に「利他」の言に、「自利に対する利他」と「仏力としての利他」という二つの意味があることを押さえた上で、論者は「利他教化地の益」の意味を考察している。そして「利他教化地の益」とは「他者を教化する位が念仏者に利益として与えられる」ことではないと言い、「娑婆世界において利他教化を衆生を通して実現する」ことであると述べる。この視点に立って、親鸞が語る還相回向を読み切ろうとしている。また親鸞が「註論に顕れたり」として第22願文を直接に挙げないことについて、『論註』の文脈に沿って願文の内容を確認せよという親鸞の指示であると述べる。これは第22願の成就についても同様であるとしており、大事な視点である。

また、不虛作住持功德の文（功德そのものは引用されていないが、その釈文）に出る「未証浄心の菩薩」に論者は着目し、親鸞は信心を獲た凡夫を含む意で理解していたと述べる。この視点で論者は還相回向積を最後まで読み通していく。

第四章では、親鸞が『浄土論註』の引用文に付す訓点を注意深く読むことを通して、論者は「還相」の文に法蔵菩薩を語るものと獲信の念仏者について語るものという重層的関係を見ている。すなわち、法蔵菩薩の還相というはたらきと、法蔵菩薩の還相が獲信の念仏者を

通して現れる相との二つである。訓点に敬語表現が用いられる場合は還相回向する如来（法蔵菩薩）について語っており、敬語が付されない場合は衆生の上に表れる相であると見定めて、論者は「証卷」の最後まで読み進めている。

## II. 論文審査結果の要旨

本論文は、『教行信証』の思想の柱である往相還相の二種回向について、特に還相回向を中心に考察したものである。その際、親鸞の自釈がほとんどない「証卷」還相回向釈について、どう了解していけば良いかを、先行研究に幅広く当たりながら、その上で自分の独自な見解を述べている。

口述試問においては、課題となる点、また不十分な点などについて確かめた。すべてについて触れることはできないので、主なものだけ以下に記しておく。

1、「回向」については、大乘仏教の中での意味を初めに確認しておく必要がある。また、曇鸞が『論註』において二種相を見ていく意義については、もっと論ずるべきであった。さらには、曇鸞が『論註』を書いた意図にまで遡って考えることが大事であろう。

2、先行研究を幅広く見ている点は良いが、これまでの了解と異なる意見を述べるのであれば、それがはっきりと分かる形で文章化する工夫が必要である。二種回向が同時にはたらくということについても、簡単には言えないのではないか。

3、論者は、獲信の念仏者の上に顕れる相としての還相ということ述べているが、その中身は何か、衆生がどうなることなのか。「常行大悲の益」にそれを見ようとしているが、それは伝統的には、往相回向の利益と考えられてきたのではないか。

4、訓点に注意しながら文章を正確に読もうとしている点は大事である。ただ、読み方に気をとられて、問題の出所まで遡ることができていない箇所がある。たとえば、回向を「本願の名号をもって十方の衆生にあたえたまうみのりなり」という言葉に着目するのであれば、それを掘り下げていくことが大事ではないか。

5、還相回向を語る際に親鸞が着目している「普賢の徳」についてほとんど触れられていないのは何故か。今回は「和讃」をあえて避けたということもあったであろうが、第22願については、すでに「行卷」にも出ている。これについてはどう考えるか。往相回向と還相回向の二種回向の関係をどう見るのかという問題でもある。

以上のように、本論文には今後さらに考察を深めていくべき点がある。しかし、これらは論者が提起した見解によって見えてきた課題であり、その意味でも、本論文が「証卷」をど

う読むかという視点を新たに提示していることは間違いない。特に、親鸞の付した訓点が親鸞自身の思想表現であるという観点に立って、還相回向積の全体を丁寧に読み込んでいったことはこれまでにないものと言える。この意味で、訓点到細かく留意しながら読み解いていく方法を示したこと、また引用文に親鸞の思想を見ていくことができることを示したことは特に優れており、『教行信証』研究に一つの視座を提示したと言える。課題に誠実に取り組み、現状の方法論に従って緻密に考察を重ねたものという点は大いに評価できる。

審査に必要とされる最終試験については、審査員全員により 2021 年 1 月 15 日に試問を行った。その結果、審査員一同一致して、岩田香英に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当と判断した。